

社会の中の学問——セミナーを終えて

金野美奈子

セミナーに参加する機会を得、多くのことを学んだ。門外漢からのぶしつけな問いかけにも真摯に応答してくださったみなさまに、感謝申し上げたい。セミナーを終えて改めて実感されたのは、学問の伝統を支える人と人、人の思いと人の思いのつながりの力である。どのような学術論文にもその力は流れていると思うが、通常それは底に沈んで表立ってはみえない。経済学の際の展開にかかわった女性たちの思考の跡だけでなく、そのいきいきした姿が描かれ、人の営みとしての学問と教育の魅力と魔力を存分に伝える本書はこの意味でも貴重なものである。東京女子高等師範学校で松平友子の教えを受けた亀高京子は、いつも毅然とした憧れの松平が定年で去る間際に見せた、教え子を娘のように思う情に、ほとんど呆然と立ち尽くしたという。その回想は胸を打つ。伍賀借子が尽力した竹中パブリックゼミの熱気あふれる様子も、知の喜びと力が女性たちを結びつけることをまざまざと感じさせる。戦後に活躍した竹中恵美子・村松安子による対談からも、人の思いを表現する営みとしての学問の姿が改めて浮かび上がってくる。本書自体もまた自らをその輪に連れ、つながりを後世に伝えようとするものである点で、本書はこれまでの歩みを振り返る書であるだけでなく、未来に向けた希望の書でもある。その延長であるセミナーの場にご一緒できた幸運を改めて思う。

本書の実質的な「概論」ないし「序章」とも位置付けられている対談のなかで竹中は、現在の学問がますます細かな問題にこだわり大局を見失いがちであると指摘し、「どういう流れの中で、どうしてここまで来たのか、いま何が問題なのか、を大きな流れの中で見るということ」（281頁）の重要性を強調している。細かな論点をめぐって演出された「論争」が私たちの注意をますます奪いつつある現状のなかで、この指摘に深く共感するとともに、女性と経済学という視角から、まさにこの「大きな流れ」を描こうとした本書に、心から賛辞をお送りしたい。本書が提供する思考の材料は尽きないが、ここではセミナーを終えて改めて重要であると思われた2点について述べる。1点目は女性と経済学の起点をとりまいた人々とその動きに、2点目は女性経済学者が生活ないし社会的世界の〈経済学化〉に果たした役割にかかわる。

女性と経済学の起点をとりまく動き

女性と経済学の起点をとりまく社会の動きは、近代日本の一面をよく映し出して興味深い。本書から浮かび上がる構図を、いくつかの点を付加して筆者なりに物語れば、以下のようなになる。

女性に焦点を当てた本書では必ずしも触れられていないが、明治期に多くの留学生が海を渡り、近代学問としての経済学を学んだ。アメリカ合衆国初の大学レベルのビジネス・スクールとして、フィラデルフィアのペンシルベニア大学に1881年に創設されたウォートンスクールも、その初期から多くの日本人学生を引きつけた（これについては、1880年代半ばの日本人留学生と現地の有力クエーカー、また財閥企業との関係を明らかにした戸田徹子による論考がある。本書の主要登場人物のひとりでもある新渡戸稲造の社会的ネットワークにもつながる。「フィラデルフィアにおける柴四朗——日米交流の起点として」『山梨国際研究』9、2014年）。

大正期、とくに第一次世界大戦末期以降、経済学が存在感を高めるとともに、も含めた高等教育で重要性を増していく。新渡戸稲造を初代学長とする東京女子大学が1918（大正7）年4月30日に開学、女子高等教育機関としてわが国で初めて授業科目に経済学を置いた。1918年は、日本における消費経済研究の先駆者・森本厚吉が新渡戸も学んだジョンズ・ホプキンス大学への2度目の留学から帰国し、消費経済研究者として国内での経済学教育に取り組み始めた年でもある。翌年、東京帝国大学では既存の経済系2学科が経済学部として独立し、女高師での「家事経済学」教授者となる使命を帯びた松平友子が、同校から「委託」されて学び始めた。帝大が聴講生制度を正式に採用し女性も聴講生として受け入れるようになったのは1920年であり、それに先立つ動きである。

地歴科を卒業した松平になぜ白羽の矢がたったのかは、明らかでないようだ。血筋と明晰さを買われたということだろうか。いずれにしても、松平が東京帝大で新たに3年間経済学を学んだあと、全5編からなる大著『家事経済学』を短期間で書き上げたのは、たしかに驚嘆すべき事柄である。松平が学んだ時代の帝大経済学部には新渡戸稲造がおり（東京女子大学長は兼務）、新渡戸と森本にはつながりがあったことを考えれば、森本がアメリカで学び日本で展開した消費経済学、またその家庭生活管理への応用という視点が、経済学の視点で家庭を捉えるという松平の家事経済学に何らかの形で影響を与えた可能性もあるのだろうか。松平を指導したとされる山崎覚次郎は、帝大での経済学部独立を推進して第2代経済学部長となり、のちに日銀顧問、金融学会初代理事会長を務めている。

これらをとりまくメディアの動きも注目される。1918年2月、内藤民治主幹の『中外』誌（1917年創刊）は山川菊枝の「女性のみたる女の問題」を掲載、山川はそのなかで現状批判の理念として「婦人の独立」と「自由」を掲げ、「経済問題」こそが、その実現の鍵だと論じた。嶋仲雄作の『婦人公論』誌（1916年創刊）も山川による「与謝野、平塚二氏の論争」を同年9月号に掲載し、「経済問題」を新時代の「新しい女性」をめぐる言説の核のひとつとしていくことに貢献する。

メディアと教育との「連携」ともみえるこれらの動きのなかで、経済学は「新しい時代」の必須学問の中に地位を得ていく。同時に、家庭や女性がそのプロジェクトの重要ターゲットのひとつとなっていく方向性が、明確に姿を現した。

女性経済学者による生活の経済学化

もうひとつここで振り返りたいのは、女性経済学者による生活ないし社会的世界の経済学化の歴史である。セミナーの場でも言及した論点だが、敷衍しつつ改めて述べたい。

松平は『家事経済学』において消費を経済の重要な要素として打ち出し、「主として消費経済を掌つて居る我々婦人」が、経済学の知識をもって家庭の消費管理にあたることの重要性を強調する。「消費は経済の起点であり、又終点であり、従つて又中心であるべきである。生産を旺盛ならしむべしと云ふも、交換を容易ならしむべしと称するも、又分配を公平ならしむべしと唱ふるも畢竟するに一国社会に於ける各人をして成可く十分に消費せしめ、又成可く容易に消費せしめ、又成可く公平に消費せしめ、以て人生の物質的幸福、延ては非物質的幸福の万全を期するに外ならない。是に於て消費経済、殊に消費組織たる家庭生活の経済的研究を重要視すべき所以を察知し得よう」（97頁より）。松平が合理的消費を唱え、家族という単位で「継続的に能ふ限り多くの欲望満足を得んが為に経済主義の遵守によつて多くの経済行為を秩序的・組織的に行」（98

頁より) う家族経済は、国家経済と並んで「道義的・倫理的」な意味をもつとしていることは注目される。家事の貨幣換算のアイデア、女性の就業を男性の経済力基盤の不安からくる現実的なリスク回避行動と捉える見方などからも、松平のテキストは受け手としての女性の視点を強く意識し、意図的にか結果的にか、経済学的な目線を女性たちにもまた受け入れやすいものとして提示しているといえよう。

松平の家事経済学は、伊藤秋子の家庭経済学、御船美智子の生活者の経済学へと受け継がれる。本書はこれらを「マクロな国家の経済学や企業優先の市場経済学では忘れられがち」な側面を経済学が掘り起こしてきたものと位置づける(117頁)が、それは逆に言えば、社会的世界が経済学の概念で広く覆われていく過程でもあったように見える。経済の視点から家族をとらえ、国民経済との概念的接合を試みた松平によって、経済学は家族の領域を明確に取り込む。経済関係として金融関係を重視した伊藤は、家計調査によって実証データを積み重ねることで、貨幣の流れから家族をとらえる社会的視点を強化した。御船は非貨幣経済へと経済概念を拡大する潮流に掉さし、「母なる自然」や「生命の再生産」といった概念を、自らの生活経済循環概念のなかに取り込んでいく。

これらの経済学者たちはもちろん、そのことにより、個々の具体的な日常生活も大きな「経済循環」の一部であり、だからこそ生活に基づく思考からつねによりよい社会のあり方を展望できると訴えようとしたのである。しかしそうすることで、消費であれ労働であれ生産であれ、また国家の視点であれ企業の視点であれ家庭の視点であれ、経済効率の向上を善とする、経済学的世界観の拡大もまた助けられた。これは基本的に、戦後の竹中恵美子の労働とジェンダー研究にも引き継がれているといえようが、竹中の場合はより直接に労働に焦点を当て、しかも労働価値説を堅持したように見える点で、さらに別の側面も付け加えている。竹中はたとえば、ケアを労働と捉えることの功罪には自覚的であったと思う。「レイバリズム批判」にも賛同している。だが、人は労働力としての価値を何か「独立」したものとして持っているという発想は、少なくとも「経済的価値」に特別の地位を与える世界観のもとでは、それを強固に支える要素として働くだらう。

これらの女性たちは学問を上から振りかざすのではなく、家庭内や個々の労働の場での「女性のリアリティ」に基づく言葉と理念を紡ぎ、提示してきた。このような言葉と理念は多くの人々(女性に限られない)の世界観に影響を与えようという意味で、女性経済学者たちこそ「社会の経済(学)化」の前衛と呼ばれるにふさわしい。だがこれらの女性たちが、たとえば「消費」や「労働」の社会的位置を際立たせる一翼を担ってきたとすれば、現代的な消費と労働のなかに絡めとられた今の私たちの姿を思うとき、アンビバレントな思いもやはり禁じ得ない。コストとパフォーマンス、投資とリターンといった経済効率の概念が、貨幣タームを超え、社会的世界のさまざまな側面を了解する枠組みとして日常会話ですら用いられるようになった今の社会を、松平は今、どんな思いでみつめているだろうか。

おわりに

社会科学の知は、社会をとらえるだけでなく、社会を構築する。社会をとらえようとする学問は、ある特定の「社会の見方」「見え方」を人々に示し、それが人々に受け入れられる程度に応じて、社会の構築にかかわるのである。自分たちのポジティブな像が描かれた社会像に惹かれる習性を、人は持っているようだ。解放のための学問として提示されたものを私たちが受け入れるとき、私たちはその解放のビジョンだけでなく、そのビジョンが拠って立つ前提をも一緒に受け入れることになる。エコノミック・「マン」批判がホモ・エ

コノミクスを肯定するように、アファーマティブアクションの主張がより大きな社会構造を肯定するように、批判や解放という名の下で問題含みの現状が結果的に肯定されてしまう構図は、あまりにもありふれている。このような構図を超える社会ビジョンとその実現への示唆を、本書で明らかにされた女性経済学者たちの残した思想から、またその影や断片から、また現在も多くの人々によって続けられているさまざまな試みから、経済学に関わるみなさんが拾い上げ、育てていってくださることを、またそれを広く社会に発信していってくださることを、心から期待する。私もまた私の持ち場で、格闘を続けていきたい。

(文中では敬称を省略させていただいた)